



確認できました。表。一方で、農業機械による圧密などで作土の直下層(25センチ前後)の固相率が増加しており、仮比重が0.90g/ml(06)、07年の調査時0.75)と高くな

諫早湾干拓地の土壌断面調査

過湿状態の改善進む 排水性低下の懸念も

営農開始によるグライ層の出現位置と作土直下層の土壌物理性の変化

調査年	グライ層の出現位置 (cm)	仮比重 (g/ml)	三相分布 (100ml当たり%)			
			固相率	液相率	気相率	孔隙率
2006・07年	49.4	0.75	31.9	52.9	15.2	68.1
12年	67.0	0.90	36.1	55.5	8.5	63.9

※06・07年：延べ16地点を3回に分けて調査
※12年：12地点調査

諫早湾干拓地は2008年1月から営農を開始し、当初の課題であったガタ土特有の重粘質土壌の改良に加えて、環境保全型農業の実践に向けた農地管理がなされてきました。栽培品目や作型によって農地管理が異なることから、営農開始5年目の土壌の改善状況を把握するとともに土壌管理の課題を整理するため、12年9月に12地点で土壌断面の調査を行いました。

地下水レベルの目安となるグライ層(青灰色をしている土層)が出現する位置は、今回の調査では平均67センチで、06、07年の調査時比べて約18センチ低下しています。このことから、過湿状態の改善が進んでいることが

確認できました。表。一方で、農業機械による圧密などで作土の直下層(25センチ前後)の固相率が増加しており、仮比重が0.90g/ml(06)、07年の調査時0.75)と高くな

暗きよや深耕などの継続的な実
施が必要です。
環境保全型農業を実践する上
で、作付けする農地の特性を把
握することは重要ですので、今
後も土壌の理化学性の調査を継
続して実施します。
(県農林技術開発センター・
芳野豊)